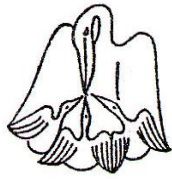


阿佐ヶ谷教会



信友会 会報

1月例会（1月24日開催）報告

使徒言行録の学び（第25回） 堀川 樹牧師
—新約聖書 使徒言行録 第26, 27章—



日差しに少し温もりを感じる日が増えてきました。思わず薄着になって皆さま風邪などひいておられませんか？ ご用心ください。

会報2月号は堀川樹先生渾身の講解で「使徒言行録第26章と27章」を学ばせて頂いた記録にご注目下さい。まとめて下さった玉澤兄に深く感謝します。3月は最終章を再び堀川先生にご担当頂く予定です。先生の最後の講解になりますので皆さま是非ご参加を検討してください。
(AT)

『聖霊行伝をたどる—使徒言行録の学び—第26章・27章』

堀川 樹 牧師

今回は26章と27章の講解になりますが、26章のユダヤのアグリッパ王の前でのパウロの弁明を中心にお話しします。22章から26章までは、どれもパウロが弁明を行った記事で、復活の主イエスを証ししています。22章ではパウロを殺そうとした民衆に向かって、23章では最高法院（サンヘドリン）の議員の前で、24章ではカイサリアに護送された後、ローマ総督フェリクスに対して、25章では2年後に着任した総督フェストゥスに弁明するとともにローマ皇帝に上訴します。そして今回の26章でユダヤ王アグリッパへの弁明を行うのです。ユダヤの民衆がパウロをユダヤの律法を乱し民衆を扇動した罪を訴え、パウロはその弁明に立ちます。そしてこの訴えを逆手にとって復活の主イエスの救済を信じて歩む理由を語る機会としたのです。

ユダヤ王アグリッパへの弁明

25章でのパウロの弁明を聞いて、フェストゥスはユダヤ人の慣習を理解できず、また、この論争に興味もなく宗教的な死者の復活という事柄の処理に困っていました。そこにユダヤ王アグリッパが表敬のためカイサリアに来たので、この裁判をアグリッパ王に丸投げします。

2節からは、パウロはユダヤ人の訴えに弁明できる機会を得た幸いを述べ、王がユダヤ人の慣習や論争点をよく理解していることを前提に話します。パウロはエルサレムでは、生粋のファリサイ派で著名な学者ガマリエルの門下生で、ユダヤの律法に精通しファリサイ派の中心にいたので、私については誰でも証言できると言います。パウロは、フィリピの信徒への手紙3章5節以下で自分の出自について、「わたしは生まれて8日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非の打ちどころのない者」と語っている通りです。

8節では、パウロは訴えられている理由である、神が死者の中から復活させてくださるということな



信じ難いと考えるのかと問います。

その背景には霊や復活を信じないサドカイ派と死者の復活を信じるファリサイ派の対立がありますが、その解説が11月の船本先生の講解録に詳しく載っています。かつてのパウロ自身も「ナザレのイエスが十字架の死から復活して私たちを贖う」ことには大いに反対して迫害を実行しました。祭司長たちから権限を受けて、多くの聖なる者を牢に入れ、彼らが死

刑になる時は賛成し、会堂でイエスを冒瀆することを強制し、外国にまで迫害に手を伸ばしたと言います。旧約聖書に精通したパウロは、イザヤ書9章1節の「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」とある神の救いの光を追い求めていたためです。彼が求めた聖書の神への信仰に熱心であった故に、十字架と復活の教えを受け入れることが出来ず迫害者になったのです。

イエスの顕現

そんなパウロがどのように回心したのかを12節から語り始めます。使徒言行録では3回にわたり主イエスの顕現によるパウロの回心についての記述が出てきます。1回目は、9章のダマスコ途上における実際の出来事、2回目はそれを思い起こす形で22章6節～11節でパウロを捕らえようとするユダヤの民衆に向かって語っています。そして3回目はこの箇所です。

パウロはダマスコ途上で真昼に強い天からの光を受け皆が地に倒され、「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか、とげのついた棒をけるとひどい目に遭う」と言う声を聞きます。「とげのついた棒」という表現は、ここだけに出てくる表現です。これは古代農法で牛と鋤の間にとげのついた棒を置くというものです。牛が嫌がって鋤を蹴ろうとすると、とげのついた棒をけることになる。痛さを教えて牛を調教するもので、ここでは神に逆らえないということの意味です。「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねると「わたしはあなたが迫害しているイエスである。起き上がれ、自分の足で立て。私があるに現れたのは、あなたが私を見たこと、私がしようとすることについての奉仕者、また証人にするため、あなたを異邦人やこの民の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。」と言います。

パウロは、ここで復活の主イエスに出会ったのです。以前から主イエスの存在は知っていましたが、ここで主との個人的な出会いを通して、イザヤ書が示す真の光が主イエスであることがわかったのです。十字架の死からの復活を通して民を贖って下さることを確信したのです。そしてパウロは新たに神の計画であるユダヤ人たちや異邦人への福音伝道へと召されていったのです。

19節からは、パウロはアグリッパ王に、これまでの福音宣教について話します。パウロは、ダマスコ周辺やエルサレム、ユダヤ全土の人々や異邦人に、福音を述べ伝え、悔い改めて神に立ち帰り、ふさわしい行いをするよう話しました。しかしユダヤ人たちは、神殿の境内でパウロを捕らえて殺そうとしたのです。パウロはそこでも旧約聖書が証しする預言者やモーセの話の範囲を越えていないことを示し、23節ではメシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、ユダヤ人にも異邦人にもまことの光である主イエスが明らかにされたことを語ったのです。

24節ではパウロの話聞いたフェストゥスは、「パウロ、お前は頭がおかしい、学問のし過ぎでおかしく



なった。」と言います。パウロは周りが理解出来ないほどに、復活の主に出会い変えられ、福音に生きる者とされたのです。主との出会いにはそれほどの導きがあります。

ローマへの護送

27章からは、いよいよパウロのローマへの護送が始まります。

パウロは、19章21節で世界の中心であるローマへ行く伝道計画を語っています。しかし長年の飢饉でエルサレム教会は窮乏していたので、アジアやヨーロッパの諸教会でエルサレム教会への献金を募り、それを届けたのちローマへ旅立つ予定でした。しかし、エルサレムやカイザリアでの2年間の拘束の後、思いもよらない囚人の形でローマへ護送されることになりました。ここでは、人間の思いを越えつつ、確かに導かれる力強い神の導きを教えられます。

27章から、百人隊長ユリウスにより数人の囚人たちと共にローマを目指して、送られます。(航路は聖書巻末の地図9パウロのローマへの旅を参照) この船は一般人や貨物ものせる船で、マケドニア出身のアリスタリコが同乗していました。この人物がローマへの旅の様子をルカに知らせたとされています。季節は冬に向かい、向かい風を受けたのでキプロス島の北の島影を通して小アジアのミラに着きます。ここで、イタリアに行くアレキサンドリアの船に乗り換えますが風は更に強くなり、クレタ島の南側の島影を通過してようやく「良い港」到着します。そこでパウロは、これからは危険が多いのでこの港で冬を越そうと提案します。しかし百人隊長は経験の多い船主の意見を取り入れて、クレタ島の西にあるフェニックス港に行き冬を越す選択します。コリントの信徒への手紙Ⅱ11章には3度の難破などのパウロの旅での困難な経験が数えられています。残念ながらここで彼の経験は生かされなかったのです。すると、出港後まもなく「エウラキロン」という北極から吹き込む暴風に襲われます。小舟を引き上げ固縛したが、強烈な嵐にふきつけられ船は流され、積み荷や船具も捨て軽量化せざるを得ないほどでした。当時唯一の方角を知る手段であった太陽や星は幾日も見えず、船は行き先を見失ってしまったのです。そんな中パウロは「元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうち誰ひとり命を失う者はいない。」そして、私の神が昨夜、天使を通して「パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。同乗の全ての者もあなたに任せる」との幻を語ります。この幻以降、不思議なことに旅の主導権は百人隊長からパウロに移っています。困難な船旅は14日間続きますが、そんな中でもパウロは食事を摂らせ元気を与え、励ましつつ船を進めます。船はついに暗礁に乗り上げ難破します。囚人を逃すと死刑になるので兵士が囚人を殺そうとしますが、百人隊長はパウロを生かすことを選びます。そこにも神さまの御手が働いたのです。そしてなんと皆で泳ぐなどして漂着した島は、イタリアに近いマルタ島でした。パウロは神の示した「幻」に従って航海を主導してイタリアの近くへと導かれたのです。神さまは私たちの思いを越えて救って下さるお方であり、主の示して下さる幻を信じ、従う者は約束の地へと導かれていくのです。

(文責：玉澤武之)